

琉球大学学術リポジトリ

教員養成最終段階におけるプラクティススクールによる総合的力量的形成とその明示的な確認に資する事業：

平成19年度文部科学省教員養成改革モデル事業(教職実践演習の試行)

メタデータ	言語: 出版者: 會澤, 卓司 公開日: 2009-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8847

引用・参考文献

- 1) Ashton, P.T. (1985) Motivation and the teacher's sense of efficacy. In Ames, C. and Ames, R. (Eds.) Research on Motivation in Education. Academic Press.
- 2) Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191-215.
- 3) 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許更新制度の在り方について」(平成18年7月11日)
- 4) Dembo, M.H. (1995) Applying educational psychology (5th ed.) Longman.
- 5) Dollase, R.H. (1996) Vermont Experiment in State-Mandated Portfolio Program Approval, J.of Teacher Education, 47 : 85-98.
- 6) 伊田勝憲 (2001) 「課題価値評定尺度の試み」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達学) 48, 83-95.
- 7) 伊田勝憲 (2003) 「教員養成課程における自律的な学習動機づけ像の検討: 自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から」教育心理学研究 51 (4) , 367-377.
- 8) 前原武子・平田幹夫・小林稔 (2007) 「教育実習に対する不安と期待、そして実習のストレスと満足度」琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 14, 211-224.
- 9) 瀬戸美奈子・石隈利紀 (2003) 「中学校におけるチーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究: スクールカウンセラー配置校を対象として」教育心理学研究 51 (4) , 378-389.
- 10) Shulman (1994) Portfolios in historical perspective, Presentation at the portfolios in Teaching and Teacher Education Conference, Cambridge, MA.
- 11) Tschannen-Moran, M. & Woolfolk, A. (2001) Teacher efficacy: Capturing an elusive construct. Teaching and Teacher Education, 17, 783-805.
- 12) Wade, R.C.& Yarbrough, D.B. (1996) Portfolios: A Tool for Reflective Thinking in Teacher Education?, Teaching and Teacher Education, 12 : 63-79.
- 13) 吉崎静夫 (1997) デザイナーとしての教師 アクターとしての教師. 金子書房.

謝辞

プラクティススクールの開校にあたっては、教育委員会関係者ならびに多くの児童・生徒とその保護者の方々にお世話になりました。また、事業効果の検証のためのデータ収集の際には、琉球大学教育学部学部生の協力を得ることができました。ここに記して感謝の意をあらわします。

おわりに

「教職実践演習」は、近い将来の入学生からの学生便覧事項になると考えられるが、その実施にあたって教員養成の現場サイドでは課題が山積している。具体的には「内容はどうするのか？誰が担当するのか？他の授業との兼ね合いはどうか？」といったさまざまな問題である。教職実践演習はこれまでになかった考え方、つまり従来同じように追加改編された他の教員養成系の授業科目とは異なり、教員免許授与時点（卒業時点）でのチェック機能を果たしたり、新たに制度設計が行われた教員免許更新制とも関連したりなど、教員養成の枠を超えて現代の大学教育にとってきわめて特徴的な授業科目として捉えることが重要であろう。また、教科専門の教員と教職の教員が共同で本授業科目を担当しなければならず、課程認定を受けている大学・学部教員における特に教科専門教員の教員養成に対する意識改革が求められていると言えよう。

今回琉球大学教育学部においては上記の考え方を踏まえ、これまでの授業科目の発想にはなかった「模擬学校（プラクティススクール）」を試行することで本事業目的を達成させようとした。モデル事業を終えて本事業の特長を記すなら、2点あるだろう。一つは、本モデル事業に「参加した学生」は、「参加しなかった学生」と比較して学校現場マネジメント力が培われたのではないかという点である。これについて、例えば欧米では5ヶ月か、それ以上の長い「教育実習」が一般的であり、その中で学校現場マネジメント力を体感し、修得するのに対し、わが国では年々学校現場が厳しくなっているとは言うものの、制度的には学校現場に出る機会がほとんどなくても（数週間で）教員になれるチャンスが広がっている。また、教育実習など学校現場に出ても「授業実践」など偏った場面ばかりに視点を向け指導が行われているのが現状であり、真に現場サイドが求めている教員の資質能力を形成・確認させる授業科目やシステムが教員養成段階で整備されているとは言い難い。

本事業の特長の二点目は、教科専門・教職専門に関わらず、多くの先生方に応分に参加していただける方法論であり、多くの大学教員に身近に学校現場を感じ取っていただける点ではなかったかと考える。プラクティススクールは、特に専門的な知識や経験がなくても大学教員であれば学生を指導・評価することが可能である。

文頭に課題が山積していると述べたが、本モデル事業がそれらすべてをカバーしたり、解決したりするとは当然考えていない。終わってみてさらなる課題が見えてきたのが本当のところである。本報告書が教職実践演習の実施に際して、基礎的資料として活用していただき、何らかのお役に立てれば幸いである。

(小林稔)